

「看護を学ぶ学生たちの学習支援」

2024年8月23日、関東甲信越ブロック研修会を開催しました。

1都9県の学校から131名が参加しました。

ハイブリッド研修で、会場は、ビジョン”三郷校 NEXT10“を掲げ「未来を歩む力を育み続ける学校」に取り組んでおられる「獨協医科大学附属看護専門学校三郷校」。

講師は、芝浦工業大学柏中学高等学校生物学教室・勤医会東葛看護専門学校講師 相馬融（あきら）先生。先生の高校と看護学校における長年の教員経験から、以下の三点の内容で進められました。

第一に、「高校生の学力の現状」では、理科の履修内容が断片化したために、「生物基礎」では「ヘモグロビンの酸素乖離曲線」「肝臓・腎臓」が削除されたこと、アクティブラーニングや観点別評価の功罪として、「机を集めてグループ討議というワンパターンの学習形態が横行することにより学習内容の理解が薄くなる傾向であること、SNSに依存し何でもすぐ答に行き着く感覚でAI的な試行錯誤を経ない学び、かつ、手で書くことが減少し学習という行為が浅いところで止まっていることなど、現行学習指導要領に起因する問題点を説明してくださいました。

第二に、「勉強しない学生への対処」として行なわれているプリントの穴埋め学習は教員・学生双方にとって一見達成感があるが、自分で取り組んだという実感はないことや、パワーポイントは資料提示には良いがノートをとるのが難しく、スライドを印刷して配っても取り組んだ実感は得られないことを取り上げて、SNS世代は見て読むことによる情報収集に偏っているので手を使わせる教材作りの重要性を説明されました。



第三に「看護学生の興味・関心を高める授業」では、先生の著書である『大人のための生物学の教科書』より、食卓に並ぶものを入口に、「メイクイン」や「とちおとめ」でクローンについて説明し、「赤血球の数と寿命」については、「骨髄から血球が湧き出すイメージをもてるように伝える」という数的イメージを驚きと面白さを強調され、ホワイトボード6枚に板書し説明されました。

参加者のアンケートより、「授業に学生を引き込んでいく技術と話術など、国語力の大切さ」、「学生の目線に立ち返ることができ、学ぶことの本質を考えて自身の講義を見直すことに大変役立った」、「学生に驚きや疑問を生じさせる間を大切に流れを作り出す授業展開にしたい」等多くの感想を得ました。

参加者が自身の授業を振り返り、学生の学力に応じた学習支援と今後の授業づくりに多くの示唆を得、明日への活力を得ることができた研修となりました。

令和6年12月9日

日本看護学校協議会 関東甲信越ブロック

茨城県役員 小笠原 幸